

## 聖徒の日 説教 「父を思い、母を思う」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020年11月1日

### イザヤ書 44章6～17節

聖書の御言葉の中には、私たちが生涯を通じて繰り返し聞いていくものがあります。その中の一つが十戒です。そこで、主なる神様はまずこう語り始めます。「私は主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、私をおいて他に神があってはならない」と。そして、この日私たちが聞いている御言葉も内容としてはそれと同じことが言われています。そこで神様はこう仰います。「私は初めであり、終わりである。私をおいて神はない。・・・恐れるな。怯えるな。すでに私はあなたに聞かせ、告げてきたではないか。」と。それゆえにまたこう語るのです。「あなたたちは私の証人ではないか。私をおいて神があろうか、岩があろうか。私はそれを知らない」と。つまり、こうして神様の御前に立ち、イエス様と共に生きる私たちは、神様の力強さと不退転の覚悟を知るがゆえに、神様の証人であると神様ご自身にそう呼ばれているというのです。従って、永眠者記念礼拝を迎えたこの日、天に召された者も地にある私たちも、それぞれが共々に御言葉を通し聞いていることは、この日を共に過ごす私たちは、共々に神様の証し人、言うなれば、神が神であることを知っている生き証人であるということです。

しかし、コロナ禍の今、この神の生き証人であるという事実がその胸の内できく揺らいでいるのを感じます。特に、今年は、三密を避ける意味から、ご遺族に対して積極的に出席を呼びかけることできなかったことから、すべての人々に納得していただける答えを私たちは用意することができませんでした。ですから、礼拝が天と地とを繋ぐ出来事であり、同時に、私たちが神様にお献げすべきものであることを考えますと、すべての方々の納得を得られなかった不十分さは、画竜点睛を欠いていたと言えるのでしょうか。

しかし、そこで与えられた御言葉がこの日の御言葉であり、その御言葉が私たちのことを主の証人と呼んでいるのです。では、世界の初めより終わりまで私たちと共にいます神様が、この日、そんな私たちに何を願い、そう語りかけようとしておられるのか。いたずらな反省は、自分自身を納得させるものなのかもしれません。その反対に、御心を歪んだ形で理解させ、それを遠ざけることもあります。ですから、まずは神様の証人であることをしっかりと踏まえ、御言葉に聞いて参りたいと思います。

そこで私たちに語られていることは、私たちが信じる神様が真実かつ唯一の神様であるということです。それゆえ、力強く、終わりまでを確実に導いてくださるというのですが、ただ、それに加えてこうも仰るのです。それは、「あなたはいかなる像も造ってはならない」という偶像礼拝の戒めについてでありました。しかし、そこで語られている一つ一つの事実は、私たち人間にとっては非常に耳に痛いことばかりでもあるのでしょうか。それは、人の手の業に過ぎないものを、私たち人間は神のごとく拝んでしまうことがあるからです。そして、その可能性が大きく花開くときが、今のように苦境に立たされたときです。「溺れる者、藁をもつかむ」との諺にもあるように、そのようなとき、人は、それが鯛の頭であれば、苦境から救い出してくれるものであれば、簡単にひれ伏し、拝んでしまうものだからです。しかも、神様ご自身が、力強く、大きなことを語りながら、自らは何も動こうとはなさらないとしたらなおさらです。

また、それだけではありません。13節に「人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り、神殿に置く」とあるように、危機に瀕したときだけでなく、平時は平時で私たち人間はいろいろなことを考え、

願うものです。そして、その実現のためにはあらゆる努力を惜しみません。それは、私たち人間が常々不完全で、常に満たされていないとの思いを抱えているからです。それゆえに、もっともっとと、さらにさらにと、多くを手にし、大きな満足を得ようとするのです。ですから、古来より人間が神に期待することは多くを得る上での支えとその願いの実現でありました。そのために、人は御言葉にあるように自らをも神のごとく崇める真似までもするのです。ですから、15 節に「人はその一部を取って体を温め、一部を燃やしてパンを焼き、その木で神を造ってそれにひれ伏し、木像に仕立ててそれを拝む」とあることは、私たち人間の持っているそのための器用さと知恵と柔軟さを言い表していると言えるでしょう。

けれども、それが社会の発展の原動力となってきたのも間違いありません。ただし、そうした私たちの力は神様の賜物として与えられたものであり、ですからそれを思えば、単純な人間否定が神様の御心であろうはずありません。ところが、皮肉なことに、人間が営々として続けてきた発展のための努力とその飽くなき向上心によってもたらされたものがこの度のコロナ禍でもありました。ですから、わたしたち人間は一端立ち止まって、世界を造られた神様の御心に聞いていく必要があるのでしょうか。ただし、そこで私たちに求められることは、聖書の御言葉の中から自分が欲しいと思う、役に立つ情報を抜き出すことではありません。私たちに求められていることは、そもそもところで神様が私たちに何を望んでおられるかを知ることであり、つまり、御心を味わい、経験することだからです。そして、それは、十戒が「私は主、あなたの神」との神様の呼びかけによって語り始められているように、神様の呼びかけに応え、その神様との関係性を深め、その豊かさに与ることです。しかし、コロナ禍の今、その神様は私たちの呼びかけには沈黙するだけで何も語ってはくたさらない。そして、そう思った

のは、こうして御言葉に聞いている私たちだけでなく、今ここで神様の御声を聞いている当時のイスラエルの人々も同じでした。

国を失い、遠い異国バビロンに囚われ人として連れてこられたのが、こうして御言葉に聞いているイスラエルの人々でもありました。つまり、人々の将来は暗雲立ちこめるものであったということです。それゆえ、そこで語られることがいくら威勢のいいものであっても、改善する兆しが無ければ、威勢の良さは返って人々を虚しくさせるものでもあるでしょう。ですから、神様の言葉がどれほど人々を心に届いたことかと思いますが、しかし、神様の御言葉は、その御言葉通りにやがて実現し、人々は再び故国へと戻る事ができたのです。ですから、3 節に「あなたの子孫に私は霊を注ぎ、あなたの末に私は祝福を与える」とあるように、この御言葉の力強さを実感し、励まされ、勇気づけられることになったのが神の民イスラエルの人々でもありました。それゆえ、イスラエルの人々の信仰は、この捕囚の民としてのこの経験を通して強くさせられることにもなったのですが、ですから、そういう意味で、その同じ方向へと導かれているのがこうして御言葉に聞いている私たちであるということです。けれども、御言葉の力強さは、今の私たちにとって、それがどれほど素晴らしいものであっても、腹が満たされなければ、返って虚しさを募らせるしかありません。しかし、その私たちが、イスラエルの人々がそうであったように、同じように大きく変えられると御言葉は語るのです。

そこで、私たちは、変わることを期待し、手始めに自分のできるところからやろうとするのですが、それが、聖書の御言葉の中に記されている諸々の戒めを守ることです。そして、そうすることは、そうしなさいと言われていたことをしようとするわけですから、それ自体は間違いではありません。けれども、それが神様が私たちに真っ先に望んでいることではありません。なぜなら、神様が私たち

のことを呼びかけられるのは人格的關係を築くためであって、言いつけを守らせることではないからです。では、神様は先ず私たちに何を望んでおられるのでしょうか。それは、その声の届くところに私たちがとどまり、生きることです。ですから、今日が召された方々を覚える永眠者記念礼拝であることを思いますと、私たちがいかにして大きく変えられるかはよくお分かりいただけるのではないのでしょうか。なぜなら、私たちの父、母、愛する者が私たちに願うことは、共に暮らし、共に生きることであり、それ以外の何ものでもないからです。つまり、私たちをこうして結び合わせるものは、その中心に家族としての暮らしがあるからであり、この顔と顔を合わせる日々の暮らしがあればこそ、私たちは人として作り上げられるということです。そして、それと同じことを同じように望んでおられるのが私たちの神様なのです。

十戒の最初に語られている「あなたは私をおいて他に神があってはならない」との御言葉は、私たちの親世代の人々が親しんだ文語訳聖書では、「汝、我が顔の前に、我のほか何物をも神とすべからず」と訳されていましたが、私たちが用いるこの新共同約聖書では、「我が顔の前に」ではなく、「わたしをおいて」と私たちが受け入れやすい形で意識されています。ですから、口の悪い人は、顔を落とし、神様の面子を汚したなどと言ったりもするのですが、ただ、顔という言葉が取り除かれたことで、仮に神様の面子を潰すことになったとしても、この、「面子を潰す」ということに後ろ暗さを感じる必要はありません。なぜなら、親の面子を潰すのはその子どもしかなく、また、子が子として成長するためには、子には親の面子を潰すことが許されているからです。言うなれば、親のすねはかじるためにあると巷間で囁かれているように、親の面子は子の成長のためには何度も何度も潰されるためにあるということです。それは、面子を潰し、そこで雷がどれほど落とされようとも、親と子の関係性は、強められこそすれ、失われる

ものではないからです。ですから、神様の面子を潰すことに私たちは怖じ気づく必要はありません。ただし、そのためには、私たちには一つ忘れてはならないことがあります。それが、神様と顔を合わせ、日々暮らすということです。それは、親と子がどこまで行っても親と子であるように、私たちと共にあり続けることが神様の願いであるからです。

神様の面子を繰り返し潰すことで知らされるのは神様の御心です。ですから、そこで御心を知った私たちはそのままではできません。今度は、神様の面子を潰さず、その顔を立てようとするのでしょうか。そして、それゆえにまた、私たちは、神様の御前にあって、自らの面子を立てることになるのです。ただし、そこで肝心なところは、いずれの面子が立つか立たないかではありません。神様の御前にある私たちが、子としてしっかりと生きているかいないかということであり、そのために神様は面子が潰されることをも厭わないということです。ところが、自分の面子が立つ立たないというところに拘ってしまうとどうでしょう。自分のことだけと言うことにもなりかねないわけですから、それをしっかりと生きているとはなかなか言えないようにも思うのです。けれども、親にとって子であるということは、そもそものところでそう言うものなのかもしれません。まただから、自分の面子に拘ってしまうのでしょうか、しかし、それは、神様の顔を私たちが見えていないからではなく、しっかりと意識しているからです。そして、その中で私たちがいずれの面子が立つか立たないかを気にするのは、自分自身が不完全で、不十分であることをよく知っているからです。それゆえに、この不完全で不十分な状況に満足できずにいるために、どうしても我を通そうとしてしまうのです。ところが、その私たちが聖徒の日である今日、召された愛する人々を思い起こしながら、礼拝を共にしているのです。

神様とイエス様と愛する人々のことを心に留め、この日、私たちが共々に同じ

時間を過ごすのは、私たちが神様の言いなり生きているからではありません。もちろん、親の顔をうかがって、この日を特別に覚えたからでもありません。私たちがこうして集まっているのは、後々うるさいことを言われたくないからではなく、自らの意志で、自由にこの時を過ごそうとしているからであり、従って、そういう意味で、私たちは今、この時を自分らしく過ごしていると言えるのでしょう。そして、それが、他でもない、神様の望みであり、私たちの親の思いでもあるのです。ですから、先ほど面子が立つ立たないということを言いましたが、神様の顔が立ち、同時に私たちの顔も立っているのがこの時の私たちであり、つまりは、そういう意味で、自分らしく生きている私たちは、御前にあってしっかり生きているということです。

ただし、この自分らしくしっかり生きるということは、その場限りの、この時限りのものではありません。神様の願いも親の願いも、この後もずっと続けていくことであり、そして、その私たちがこの後もしっかりと生き続けることができるのは、神様が私たちと共にいてくださっているからです。そして、この共にいます、共にあるということは、神様が私たちの傍らで置物のようにただ立っているということではありません。共にあるということは、神様が神様ご自身として働かれる、働きかけてくださっているということです。ですから、私たちが神様に対し心の中で様々な悪態をついたりもするの、神様が御前にあり、働きかけてくださっていることを知っているからで、そして、それが今この時のコロナ禍でもあるのでしょうか。

ですから、悪態をつこうが何をしようが、それが、私たちの今のありのままの姿であるわけですから、それを隠そうとする必要はありません。大切なことは、その私たちに向かって、神様が御言葉を通してこの日このように呼びかけ、その声の響くところにその私たちを置き、こうして自分らしくあることをお許しくださっているということです。従って、聞

き分けの良さが私たちらしさではなく、また、それがしっかり生きているということでもありません。今申しましたように、私たちがいるべき場所でしっかりと自分の命を見つめることが、私たちにとってのしっかり生きているということであり、まただから、そこで暮らしを立てる私たちは、この神様との日々の関わりを通し、自らの人生を、その生涯を御心に適った形で築き上げることになるのです。そして、それが私たちに許されるのは、神様が私たちと共にいますとお方であるからです。それゆえ、私たちに働きかけ、終わりまでを共に導いてくださっている神様について、御言葉は「私は初めであり、終わりである」と神様ご自身についてこう語るのです。

そして、この終わりに約束されているものが愛する者との再会です。イエス・キリストが再臨されるその時、親と子が、子と親が顔を合わせる日が実現すると御言葉を通して神様は約束されるのです。そして、それは、自分の近いところだけではありません。すべての命ある者の関わりを支える神様ご自身と、すべての命が顔と顔を合わせることが許されているのです。ですから、今この時はそのために私たちに与えられているものであり、私たちの愛する人々もそのために備え、この今という時を主の御許にあって過ごしているのです。それゆえ、私たちが主の証人であるということはその日を待ち望む者であるということです。つまり、私たちは待つ身であると同時に、待たれる身であり、それを深く知っているのが神様の証人であるということです。ただ、待つということは簡単ではありません。けれども、そうであるからこそ、御言葉を通し神様は次のように励ましてくださるのです。「昼、主は命じて慈しみを私に送り 夜、主の歌が私と共にある。私の命の神への祈りが」と。神様との豊かな交わりの中に置かれ、愛する人々との再会を待ち望み、自分らしくしっかりとこれからを歩んで参りたいと思います。祈りましょう。